

茨城県におけるチュウヒの繁殖初記録

池田 昇¹・田沼 寿²

1. 〒302-0109 茨城県守谷市本町4533-4

2. 〒314-0253 茨城県神栖市須田794-4

チュウヒ *Circus spilontus* はヨーロッパチュウヒ *Circus aeruginosus* の東に分布する種で、バイカル湖周辺、モンゴル以東、アムール川流域、中国の内モンゴル中部から東北地方の北・中部、ウズリー地方で繁殖し、東南アジアで越冬する(森岡 1995)。日本では北海道や九州以北の湿地や干拓地、湖沼岸や大きな河川の岸边などの広いヨシ原で局所的に繁殖し、一部には留鳥と思われるものがある。多くのものは冬鳥としておもに本州以南に渡来する(森岡 1995)。関東地方での繁殖事例としては、千葉県浦安市日の出のヨシ原で1993年から1998年まで繁殖していたとの報告があるが、卵内に大量の化学物質が蓄積されていたため、ふ化には至らなかったようである(初野 2003)。茨城県では利根川河川敷等で周年生息していることが確認されており、つがいによるディスプレイも頻繁にみられているが、確実に繁殖しているかは確認されていない(茨城県 2002)。また、地元の野鳥観察団体の会報にはチュウヒの巣立ちビナとされる写真が掲載されているが、それがチュウヒであるか否か詳細は明らかでない(鈴木 2005)。茨城県においてチュウヒが繁殖している可能性がきわめて高いものの、いまだにその確証は得られていなかった。筆者らは、2006年に茨城県の利根川下流の河川敷において、チュウヒが確実に繁殖していることを確認したので、ここに報告する。

2005年 5月、筆者の一人である田沼は利根川河川敷のヨシ原(以下、当該地)の数か所で、タカ科のものと思われる卵やヒナのいる巣を発見した。2006年 5月16日に筆者らは、利根川河川敷のセイタカアワダチソウ *Solidago altissima* がまばらに混じるヨシ原となっている当該地へ行き、田沼が以前確認したという巣を探した。筆者らが当該地付近を捜索していると、チュウヒの親鳥が足元近くから飛び立った。そのため、その地点をていねいに探したところ、地上約50cmのところ、枯れ草を敷き詰めた直径約60cmの巣があり(図 1)、ふ化後 1週間前後と思われるチュウヒのヒナ 4羽と卵 1個を発見した(柿澤・小海途 1999)。4羽のヒナはともに白い綿羽におおわれ、ニワトリのヒナより少し小さかった(図 2)。この間、親鳥は上空を鳴きながら旋回し、筆者らが巣を離れると親鳥のうち 1羽が巣の近くに降り、その直後に別の親鳥が餌を運んできたことを確認した。その後は、ヨシ原に道筋ができてしまうことや繁殖を阻害してしまうことに配慮し、巣から 500m程度離れた土手の上や対岸から、観察を行なうのみとした。

2007年 3月28日 受理

キーワード: チュウヒ, 繁殖, 茨城



図 1. チュウヒの巣.

Fig. 1. A Nest of Marsh Harriers.



図 2. 巣の中のヒナ.

Fig. 2 Chicks in the nest.

7月15日は午前7時から正午まで、巣を中心に3つの観察定点を置き、親鳥の飛翔と生息状況の把握を目的として観察を行なった。その結果、午前8時30分に筆者の後方(南側)から、初列風切羽が5枚しか残っていない雌と思われる個体が、足に小動物をつかんで「ピイピイピイ」と鳴きながら巣周辺のヨシ原へと降りるのを確認した。続いて、その雌とは別と思われる個体が、それよりも少し先のヨシ原に同じように餌をつかんだまま降りた。その20分ほど後、親鳥のうち1羽がヨシ原の上を低く、筆者から北の方向に飛び去った。森岡ほか(1995)によれば、ふ化から1~2週間後に雌雄ともヒナのために餌を運ぶようになり、ふ化から3週目以降では雌は風切羽が換羽中であっても、それを中断して狩りに参加するようになる。また、ふ化後一か月くらいするとヒナは、巣を離れて近くの草陰に身をひそめ、疑似巣を作りながら2~3日ごとにヨシ原の中を移動するようになり、巣立ち後もしばらくは親から餌をもらい続け、少なくとも巣から離れるようになってから32日目にはひとりだちしていたとある。チュウヒの巣立ちをいつとするかは難しいが、これらのことや7月15日は5月16日に1週齢のヒナを確認してからほぼ2か月経つことから、7月15日の観察の時点で当該地のチュウヒのヒナは巣立ち後あるいはひとりだちに近い状況であったと考えられる。

当該地は利根川河川敷に形成された天然のヨシ原で、本州におけるこうした環境での繁殖事例はきわめて少ないものと思われる。今回、ヒナの巣立ちを確認できたのは1か所のみであるが、当該地では複数のつがいがみられる。そのため、今後は範囲を広げて詳細な調査を行ない、当該地では複数のつがいが繁殖しているのかを確認していきたい。

本論文作成にあたっては、原稿に対し有益なご指摘をいただいた日本野鳥の会茨城支部長の池野進氏に厚く御礼を申し上げる。

引用文献

- 初野謙. 2003. 中央防波堤内・外側埋立地の鳥の14年の変化(第2回). *ユリカモメ* 574: 18-20. 日本野鳥の会東京支部, 東京.
- 茨城県生活環境部環境政策課. 2002. 茨城県野生鳥獣生息分布調査報告書(平成12・13年度). 茨城県, 水戸.
- 柿澤亮三・小海途銀次郎. 1999. 日本の野鳥巣と卵図鑑. 世界文化社, 東京.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
- 鈴木恒治. 2005. *かもめ* 112: 1. 波崎愛鳥会, 波崎.

First Breeding record of Marsh Harrier *Circus spilonotus* in Ibaraki Prefecture, central Japan

Noboru Ikeda¹ & Hisashi Tanuma²

1. 4533-4 Honcho, Moriya, Ibaraki 302-0109, Japan

2. 794-4 Suda, Kamisu, Ibaraki 314-0253, Japan

The breeding of Marsh Harriers *Circus spilonotus* has been recorded in many parts of Japan, but not in Ibaraki Prefecture.

On May 16 2006, however, we discovered four chicks and one egg of Marsh Harriers in a nest built about 0.5m above the ground in a natural reed bed along the lower reaches of the Tone River. The chicks were covered with white down, appearing to be approximately seven days old.

On the morning of July 15, we observed the parent birds carrying food to the general area around the nest site, which suggests at least some of the chicks fledged successfully. This is the first breeding record of the species in Ibaraki Prefecture.

Key words: Marsh Harrier, breeding record, Ibaraki Prefecture

